

令和 7 年度第 1 回 発達障害者地域支援協議会 議事要旨

【日時】 令和 7 年 10 月 27 日（月） 18：30～21：00

【場所】 仙台市障害者総合支援センター研修室 1

【出席者（五十音順）】

小野寺委員，上西委員，黒澤委員，今委員，齋藤淳子委員，齋藤純子委員，齋藤友美枝委員，佐々木委員，佐藤智美委員，佐藤陽子委員，佐保委員，高橋委員，田中委員，千葉委員，野口委員，渡部委員，谷津委員，米倉委員（＊大友委員欠席）

【事務局】

＜健康福祉局＞

（※健康福祉部 水野部長欠席）

障害福祉部 都丸相談支援担当部長

障害企画課 坂井課長

障害者支援課 宍戸課長

北部発達相談支援センター 薦森所長，成見地域支援担当課長，奈良主幹，久保田主幹
企画調整係 高木係長，乳幼児支援係 佐藤主幹兼係長
学齢児支援係 高橋主幹兼係長，成人支援係 内藤係長

南部発達相談支援センター 五十嵐所長，乳幼児支援係 鈴木係長，
学齢児支援係 山口係長，成人支援係 後藤主幹兼係長

＜こども若者局＞

こども家庭保健課 斎藤課長

児童クラブ事業推進課 久本課長

運営支援課 加藤課長

＜区保健福祉センター＞

太白区家庭健康課 小山課長，泉区障害高齢課 中川課長

＜教育局＞

高校教育課 中村課長，特別支援教育課 高橋課長

1. 開会

2. 会長挨拶

- ・野口会長より挨拶

先日，東京で日本 LD 学会が開催された。学会が『好きをとことん，楽しむをとことん』と，非常に良いテーマで，私たちが考える方向と一致する内容であると思った。高市総理大臣が就任にあたった話の中で，「Work-Life Balance に関係なく，頑張ります」という話が出ていたが，日本 LD 学会の中の本田秀夫先生の講演では，「Work-Life Balance ではなく Duty-Fun Balance で考えていくべきではないか」というお話をされていた。義務（Duty）と楽しみ（Fun）。Work が Fun の場合もあるだろうし，やらなくちゃいけないことと，自分が楽しんでやることを考えていくべきなのではないかという話であった。本日，作業部会からの報告があるが，本日は，そういった視点で皆様からのご意見をいただければと思っている。

3. 委員紹介

- ・聖和幼稚園 大友まゆみ委員が欠席
- ・健康福祉局 水野障害福祉部長が欠席
- ・事務局については名簿を参照

4. 議事

- ・委員 19 名のうち 18 名が参加し，仙台市発達障害者支援地域協議会設置要綱第 5 条の規定に基づき，会議が成立していることを確認。

- ・議事録署名人として、小野寺委員を選出。

(1) 本市における発達障害児者支援の現状と課題

野口会長	それでは議事1について、事務局から説明をお願いします。
事務局 (蔦森所長)	資料1について説明
野口会長	ただいまの事務局の説明について、委員の皆様から何かご質問があれば受け付けたい。
野口会長	アウトリーチ支援に力を入れてきていると思うが、現在、アウトリーチを進めていく上で、課題となっているものはあるか？
事務局 (成見課長)	アウトリーチ支援の担当が配置されて乳幼児が3年目、学齢児が2年目となる。支援の積み重なりはあるが、現場で職員の異動や管理職が変わってしまった際に、支援が振り出しに戻ってしまう場合があり、課題として大きいと感じる。そのため、人が変わっても大切にしたい視点が、施設や地域に残っていくような仕組み作りができるとよいと考えて取り組んでいる。
野口会長	<p>どちらも人が変わっていくということがある。私は仙台市で巡回相談を行っており、私自身は同じ小学校に6年間、あるいは中学校まで継続して関わることもある。その中でどんどん先生方は変わっていく。例えば6年生になった時に、そのこどもの状態を先生が見て「すごく大変なんです」とおっしゃったとする。しかし、私から見ると大きく成長している。そうしたことを伝えるだけでも、だいぶ子どもの捉え方が変わることがある。このように、継続的な情報の引き継ぎ等をどうやって行っていくかについては、非常に重要な課題だと感じる。</p> <p>他にありますでしょうか。高橋委員お願いします。</p>
高橋委員	アウトリーチ支援について聞きたい。学校や保育園など、元々支援が必要なこどもがいることを、職員がわかっているような場所だと支援を手厚く受けられたり、相談に繋がったりできる環境があると思う。しかし、発達障害のある成人が一般企業で働いている場合、そもそも同僚や部下などに支援が必要な人がいるという認識がまだ薄いように感じる。そういうところだと、困っていても相談につながりにくい現状があるが、どのように支援につなげるかなど、そうした方々への支援の取り組みがあれば教えて欲しい。
事務局 (蔦森所長)	例えば、企業向けの研修会に講師として出向き、発達障害の特性の理解や対応方法について説明しており、併せて、アーチルではどのような相談ができるかなどについて、企業の方々に広く理解を深めていただけるような取り組みを進めているところである。
事務局 (南部発達相談支援センター主幹兼成人支援係長)	一般就労をしている方や、障害者雇用で働いている方について、直接相談することが少ない状況ではあるものの、職場でうまくいかない、コミュニケーションがうまく取れないなどの方が新規相談としてアーチルに来所するケースもある。20代の新規相談が一番多く、障害の特性について整理を行いながら、得意不得意をご本人が分かった上で、職場に戻っていけるような形で支援をしている。必要に応じて障害者手帳の取得や福祉サービス等につなぐなども支援しています。
田中委員	保護者の立場として思うこととしては、アーチルの支援について保護者に全然伝わっていないと感じる。それは、保護者支援の「まろん」をやっているのだが、「まろん」に来たお母さん方が「もう学校

	<p>に入るので、アーチルは終わりなんです」と話していた。そのお母さんは学齢期以降、自分たちとは関係がなくなる・保護者支援をしなくなると思っていたようだった。そうではなく、一生涯の支援だから、大人まで相談ができると伝えた。私が訂正して伝えたのだが、本当はそれを伝えるのは、誰がする仕事なのだろう（アーチルがする仕事なのではないか）と思いながら伝えた。</p> <p>もう一つは、学校に入学する予定のこどものお母さんが「知的に遅れがないので、相談支援などが入っていないが、学校とやり取りするにはどうしたらいいかわからない」という話をしていた。それについても「アーチルに相談するといいんだよ」と伝えたのだが、「だって、学齢児支援係の人は幼児の育ち知らないじゃないですか。そういう人が学校に来て、うちのこどもの説明をされても、何か途切れたところから話されても、違うんですよ。乳幼児支援係の人が来てくれればいいのに」とおっしゃっていた。資料1のスライド2の、重なっている部分をしっかりつないでもらわないと、「受け継がれて支援されている」と感じないのだ、そういう風に思った。成人になってからも、支援の対象としてアーチルを見ていない親がすごく多い。生活介護事業所や就労継続支援B型を使うタイプの人は、すでに相談支援事業所が入っている人が多く、相談支援事業所と、各事業所とのやり取りする機会も多くなるため、困ったことをすぐ、ダイレクトに解決できる強みがある。しかし、今卒業する方たちは、セルフプランが多く、親が施設とやり取りしないといけない状況になっており、すごくおかしいと感じる。アーチルが地域に出向いて行って、そこを宣伝していかないと、親がアーチルをうまく使わない・使えない状態なのではないかと思う。</p>
野口会長	<p>小学校に入って間もなくの頃は、学齢児支援係は、ほとんど本人や親御さんと会っていない状況と思われる。確かに学校の事自体は学齢児支援係のほうが、色々な事情に詳しいかもしれないが、こどもの様子を考えると、例えばそこは2人（乳幼児支援係と学齢児支援係）で行く体制を取るなど、そのようなことを考えていく必要があるのかもしれないと思ったが、いかがか。</p>
事務局 (葛森所長)	<p>ライフステージが変わるところを、どのように重なり合いながらやっていくか、同じ機関で係は違うが、同じ組織としてやっている、そこが本当はアーチルの強味であると考えている。ここ数年の取り組みとしては、年長（5歳児）の相談の時に、学齢児支援係の行政教員も一緒に入って就学に向けた相談を、全ケースではないがしている。また、新1年生の夏休み前までに、乳幼児支援係と学齢支援係が一緒にチームを組んで学校訪問をして、乳幼児支援係の職員が、うまく引継ぎをしながら学齢期に向けた支援のつなぎを行うなどしている。すべてのケースができているわけではないが、学校やお子さん・家族の状況を見ながら、訪問することを増やしているところである。こういう取り組みをしていくことが改めて大事だと感じたところである。また、アーチルがどういうことをできる機関なのかということである。というと、ご本人が40歳近くになり、親御さんも高齢になっている保護者の方たちから、アーチルが遠い存在になっているという声を直接いただいたりもした。今後、どのように地域に向けて発信しなくてはいけないか、しっかり考えていかなければならないということを再認識した。</p>

斎藤純子委員	資料1スライド2について。児童館・児童センターがどこにも重なっていないため、学校関係者が見たときに、学校と児童館が違うととらえる場合もあるかもしれないと危惧した。スライド49の地域支援のイメージ図では、学校・児童館・放課後等デイサービスとでつながっている図になっているが、そこは必ず重なっているというイメージでよろしいですね。アウトリーチ支援の中で、児童館、放課後等デイサービスなどでは、どのように今までしているか、教えてほしい。
事務局 (成見地域支援担当課長)	学校・児童館・放課後等デイサービスなど、複数の事業所とネットワークを組んでということも一つあるが、大きくは個別支援の中から、そのお子さんが関わっているところと連携して支援者会議を持つなどしている。個別の支援の中から、そのお子さんが関わっているところと連携して支援者会議を行い、支援方針を共有している。共有しながら支援を進めているところである。それぞれがバラバラにやるのではなく、こどものニーズを中心に、関わる機関が共有しながら支援を進めていく事を、訪問支援を重ねながら取り組んでいるところである。
斎藤純子委員	そのケースに応じた、関係者のケース会議というイメージと捉えればよいのか？
事務局 (成見地域支援担当課長)	ケース会議だけではなく、実際に学校に児童館の職員や放課後等デイサービスの職員を介した上ということもある。また、中学校区でネットワーク会議を持っているため、その中で、そのこどもに限ってということではないが、地域でこどもを支えているたくさんの機関が参加できるような場所で、こちらの方で持っているノウハウや、発達支援の視点の共有などをしてくるというような取り組みも、モデル的ではあるが、複数のエリアで実施しているところである。
事務局 (蔦森所長)	補足させていただくと、スライド2は斎藤委員がおっしゃる通り、なかなか実際の状況をうまく表しているわけではない。色々なところと重なり合いながら、将来に向けて、支援ネットワークを幾層にもつなげていくことが大事だと思っている。そのこどもを中心にして、支援ネットワークを作っていくことは非常に大事だが、関わる人が変わっていくと、そこがうまく伝わりきれないという課題もあると先ほど申し上げた。そのため、既存のネットワークがすでにあるところをうまく活用しながら、と考えている。例えば、先ほどの中学校区のネットワークなどに入れていただきながら、研修会等の切り口の中で視点の共有を図っていくようなところも取り組んでいる。
上西委員	先ほどの田中委員の話とつながるところがあるかと思うが、システムや色々な仕組みに関しては、もうだいぶ準備したり、広げたりしている部分があると思う。私は心理士でもあり、もう少し小さい範囲でいうと、苦情になるかもしれないが、よく聞く話としては「結局、アーチルは何してくれるところなの」と、いまだに言われることがある。これは、情報としては、色々なところに広がっていると思うし、宣伝もしていると思うが、最終的には、どこでアーチルの評価をするかということ、最後は多分ケースの方だと思う。ケースの相談があったときに、その相談員の方々がどのようなフィードバックをしているかが、大事だと思う。ここで、言葉を選ばずに行ってしまうと『ぶった切られた』ように感じる方がいると、そこで「もう支援は受けられないんだ」「ここで終わりなんだ」という感覚になりやすいところがあるのかなという風に感じている。どのようにだれがその宣伝をしていくかという、先ほど田中委員も言っていたが、新規相談、新規面接の中で、そもそも検査が必要なのかどうかということからのアセスメントになっていくと思うのですが。聞く声としては「検査の

	<p>必要はありません、何か困ったことがあったらきてくださいと言われて、何か困ったことがあったら来てくださいで終わってしまった。今困っているからきているのに。何に困ったらきていいんだろう」という声が実際にある。そうすると、個々の心理判定員や相談員のところで、「ここで一旦今回は切れるけれども、次どうということが考えられるのか」という情報提示や、次相談に来るタイミングなどを丁寧に伝えていくことが、先ほど田中委員がおっしゃったような部分のサポートにも繋がるのかなと感じた。心理士仲間ですら、「今アーチルってどんな感じ」と聞かれることがあるので、やはりケースを通して伝えていくといいのかなという風に思う。質問だが、実際にケースに当たる方について、人事異動があると思うが、人材育成や教育についてはどのようにしているか。</p>
事務局 (蔦森所長)	<p>率直なご意見ありがとうございます。我々が日常的な相談をすべてお受けするというよりは、節目の部分に立ち会いながら、大きな方向性などを見いだしていく、そこに我々が立ち会い、相談に来た方が考えていけるということが大事なのだろうという風に考えている。それを相談に来た方もしっかり共有をした中で、不安な気持ちにならないような形での相談を日々どのように行っていくかが大事だと改めてご意見を伺って感じた。アーチルは仙台市直営のため、人事異動が必ずあり、ジョブローテーションを毎年繰り返しながら、しかし、専門機関として担保しなくては聞けない機能は何か、そういうことを考えながら人材育成に取り組んでいる。年に、年度初めのガイダンスを含めて、3回所内研修という形で全職員が研修を行っている。また、職種別の研修を年3回行っている。一番大事なのは、実際相談にいらっしゃった後の振り返り、日々のOJTが大事だと思っている。困りごとを拾えていたのか、我々が行ったアセスメントは本当に妥当だったのか、そこに基づく支援の方向性、このように考えたがそれが本当に良かったのかどうか、そういったようなことを相談後、振り返りながら確認を行っている。また、新規相談であれば、常勤の医師が入ったカンファレンスの中でもそういったところについて点検をしている。日々のそのような積み重ねが、人材育成する上では大事かなというふうに思っている。</p>
野口会長	<p>保護者の方からすると、直接支援を期待しているということがあるかもしれない。例えば、アーチルとしては、これから生涯にわたってこのような形でサポートしていきますよということを伝えて、理解していただくことが大切かと思う。伝え方によって、親御さんの受け止め方が非常に違うと感じる。実際、学校や児童館などで保護者の色々な声や実際の報告をお聞きすると、おそらくアーチルが意図したこととは違うように受け止めている場合もある。そこをどのようにフォローしていくのか、お子さんや親御さんに直接関わる皆さんは、大変だとは思いますが、色々考えながらやっていただけるといいのかなと思うところである。</p>
野口会長	<p>連携協力はどのような会議でも必ず出てくる言葉であるが、実際にその連携がどのようにあるべきか、どういう連携が望ましいのかを考えなくてはいけない。ただ、情報共有するというだけの連携なのか、情報共有をしてそれぞれが個別にやっていく連携という形もあるが、それよりももっと上で、目標を共有し、それを達成するために領域を超えて一緒に取り組んでいくというような連携もある。どのようなやり方が望ましいのかを、これから考えていかなければならないと思う。この協議会自体も、お互いを理解しながら、ネットワークや連携の形を作っていけるような場でもあるため、皆様の取り組みの状況をご紹介いただきたい。 それでは佐々木副会長お願いします。</p>

佐々木副会長	<p>2つお話ししたい。一つ目は冒頭の野口会長の話にもあったが、「楽しむ」というところ。今自分は、生涯学習の取り組みに関わっている。これは、宮城県教育委員会や、仙台市教育委員会でも文科省事業の指定を受けて、主に生涯学習課で取り組んでいるところかと思う。私自身は、宮城県を中心に携わっている。生涯学習というキーワードが、色々な分野を超えるポテンシャルを持っており、学校教育の中では学校教育と社会教育というところ、先ほどの児童館の話でもありましたが、そういう部分の垣根を越えていくということもある。メインテーマが学校卒業後の学びを保証するという事になっているため、教育と福祉をどうつないでいけるかということ、そして宮城県だと地域のリソースもかなり限られているので、福祉サービスの中だけで完結させるのではなくて、地域の資源、社会教育施設やNPOなど、そういった地域のキーパーソンをどうつないで、障害のある方たちの特に「楽しむ」ということをベースにしながら、生活を豊かにしていくかというところに取り組んでいるところである。調査研究もしており、障害の状態によっては、例えば卒後の余暇の部分が全く生活介護事業所の中だけで完結してしまっているなど、そういった課題が浮き彫りになってきた。宮城県の調査は今年で終わってしまうが、仙台市はあと2年継続すると思うので、ぜひ注目していただければと思う。もう一つは障害学生支援ということで、大学生の発達障害の学生支援。私自身が、大学で障害学生支援室長をやらせてもらっており、かなり多様になってきている。そこには、これまでまったく支援につながらなかった人もいる。そこには、やはり保護者の障害理解の困難さも見え隠れしており、非常に対応に悩んでいるところである。</p>
野口会長	<p>それでは、佐藤陽子委員お願いします。</p>
佐藤陽子委員	<p>小学校での取り組みについては、本人の教育的ニーズに応じた指導・支援をどのように進めていくかというところ。保護者との繋がりにおいても、担任だけで取り組めることは限られているため、学校がチームとなり、どう取り組んで行くかについて、日々声を掛け合いながら行っている。あとは、本人の居場所づくりについて、発達の課題のあるお子さんたちは、集団生活の難しさから、不登校になりやすい部分がある。学校にどう居場所を作れるかというところで、別室的な対応や、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な授業作りの工夫というところに取り組んでいる。どうやって学校として一丸となって取り組めるかというところが、校長の立場として考えなければならない部分である。学校の中だけでは見えにくい視点を、どのように学校の中に入れていくかが大事だと思っている。そういう意味で、支援者会議など、他分野、福祉分野、医療分野の支援者の方々と話し合う場を持ちながら対話を通して、私たちの支援を見直していく。また、新しい視点からどういう取り組みが生み出せるかというところを日々検討している。以上です。</p>
野口会長	<p>それでは、佐保委員お願いします。</p>
佐保委員	<p>弁護士と発達障害の関わりというところでご紹介させていただく。私は学校関係に関する業務をさせていただいている。発達障害者と学校との関係で言うと、インクルーシブ教育の相談を受けることが増えてきたと思う。当事者や親御さんの抱える悩みと、学校側でどのような配慮をしていけばよいのか、という狭間でトラブルが生じている。こういった会議で皆様の視点をお話いただいて、相談に活かせればと思っている次第である。少年事件も扱っているが、少年の背景として、発達障害を抱えているこどもやグレーゾーンのこどもが非常に多い。これまでどのような支援を受けてきたのか、親御さんや本人に確認しても、相談機関に繋がっていなかったり、地域の支援を受けることが出来ずに、地域から孤立してしまったり</p>

	<p>している家庭や少年もいる。全員が全員、非行に走るわけではないが、その中から一定数非行に走ってしまう子どもも出てきてしまう可能性がある。アーチルは、幼少期から家庭にアプローチしているので、なんとか幼少期からつながりを持って、支援体制を強化していただき、「頼る場所がある」「こういうところがあるんだよ」と伝えたり、地域と協力して見守りをしたりするなど、できることを積み重ねることで、少年が非行に走ってしまうことを将来的に防ぐことができるのではないかと考えて活動しているところである。以上です。</p>
野口会長	<p>それでは、高橋委員お願いします。</p>
高橋委員	<p>当事者として話させていただく。仙台市は福祉サービスを利用する際に、セルフプランで利用している方がとても多い現状である。相談支援事業所を使わないご家庭が多く、私が働いている職場でも、ほとんどのお子さんがセルフプランでの利用でしている。小学1年生で入ってきたお子さんや、小学校入学後、3～4年生など途中で利用が始まるお子さんもいるが、それまでどういう育ちをしてきたお子さんなのか、それまで保育園や学校でどのような様子で過ごしてきたのか、どういう困りごとがあったかという様子がまったくわからない状況で、ゼロから関わりが始まるお子さんがほとんどである。放課後等デイサービスに関わる前にどのような様子だったか、どのような支援を受けてきたのかというところを共有できる場があると、どのように支援すればよいかというのを考えていきやすいと感じている。私自分も当事者だが、私の夫も発達障害の当事者で、一般就労で働いている。仕事をする上で、あるいは、日常生活する上で困ったことがあったときに、一度相談支援事業所に相談したことがあった。最初の1回相談して、「では、こういう風にやってみるのはどうですか」という風にアドバイス受けたが、1回きりで相談が終わってしまうことがあった。なかなか、継続的に相談できる場所がない現状がある。何か新しい困りごとが出てきたときに、また1からどこにどのように相談すればよいか、支援に繋がっていかばいいかというのを1から考えていかなければいけない状況にある。まず、困ったときに、この人に相談すれば、「今後どういう支援を受けていかばいいか」や、今後の方向性を教えてもらえる、相談にのってもらえるという場所があると、とても助かると思う。</p>
野口会長	<p>それでは、田中委員お願いします。</p>
田中委員	<p>保護者です。家族支援として、アーチルの中で「まろん」という、「お母さんがお母さんの話を聞けたらいいね」という場を設けており、もう20年行っている。（※「まろん」は親の立場の“お母さんの立場”に特化し、お話を聞き語らう「場」であるため、あえて「母」ということを大切にしている）その活動の中では、お母さんたちが、母として聞いてほしい話は、プロの支援の人には誰にも話せない。プロの支援を受けて「実際どうだったのか」という話など、日々の実際のくらしの話を聞ける場がないと、プロによる支援を受けようという気にもならない、ということがあると思う。やはり、そこを通ってきた当事者同士で話せる場、聞ける場が保証されなければ、いくらパソコンで作った立派な個別支援計画があっても、やはり駄目なのだと思う。育ててきた人の実感の話による気持ちの支えと、プロの支援というのが、二つ、ちゃんとないと駄目なのだなと思っている。しかし、この家族の方の支援が今、崩れかかっているという状態が、とても危ういなと思っている。こういうことを話してくれる先輩お母さんがいないのと、アーチルの中で、先輩の家族（保護者）を見つけられなくなっている。結局、アーチルの相談が通り一遍の相談なので、先輩として育てていっているな、こういう良い話、こういう良い育児をしてきているなということを、相談員がしっかり見定め、先輩として育てるという</p>

	<p>か、そういう状況に多分無いのだと思う。そのため、まろんメンバーもずっと 20 年間ほとんど変わらなくて、もう来年の年末に卒業される 60 代後半の先輩とかもいらっしゃる。先輩方の貴重な話もどんどん聞けなくなるし、非常に危惧しているが、やはりその「両側から支える」ということをしっかり考えて、保護者の支援を舐めないでほしい、とすごく思う。私自身、先輩お母さんから言われたから、やってみようとか、アーチルに聞くまでもなく、先輩から言われたことで結構トントンとやれたということもあったので、そこは大事だなと思っている。アーチル職員も異動してもいいが、「この人に聞けば大丈夫」という、家族にとってキーマンとなるアーチル側の職員がいると安心かなと思う。私自身、1 人の心理士さんが、うちの息子を発見して、度々どこかで出会って、その方につながったおかげで色々な人の支援を受けることもできたっていうのもあるので、やっぱりそのキーマンを大事にしてほしいと思う。以上です。</p>
野口会長	<p>それでは、千葉委員お願いします。</p>
千葉委員	<p>保育所では特別支援のお子さんを各保育所受け入れている。公立保育所の、多い所では 1 割以上受け入れている所がある。私どもの保育所では、90 人定員のところ、9 名のお子さんをお預かりしている。重度と言われるお子さんを受け入れて、身体的なケアが多く必要なお子さんもいる。先ほど、学校の先生のお話からもあったように、職員が孤立しない職員体制を考えている。身体的ケアが大きくなってくると、私たち保育士で、専門家ではないため、外部、私どもでいうとサンホームの先生方やサンホームの作業療法士の助言をもらい、疑問などを相談ができる体制はありがたいと思う。同時に、そのお子さんが医療機関にかかっている、あるいは、訪問のリハビリを行っているときに、そちらで受けている助言と突き合わせないで大丈夫か、と感じたときに、そこと連携するという動きも行っている。職員も、共育ちやこども達の育ちを大事にするというのは、今まで積み重ねてきたところではあるが、専門家ではないところで、今、私達が体のケアをしたことで、数年後に影響がでないだろうか、例えばこういう抱き方をしたせいで何か影響を及ぼさないだろうか、大丈夫だろうか、という、常に心配しながら行っている職員がいる。その不安を、解消までとはいかないが、やはり相談体制を大事にしていきたいと思っている。そういうことも含めて、専門的な助言と、所内の職員を支える役割というか、体制は常にとっていきたいと思っている。あとは、保護者も公的な支援を受けながら生活しているご家庭がある。保護者対応もしていかななくてはいけないときに、保護者がどのような支援を受けてきて来たのかというところを知らないままに働きかけをすることによって、その保護者を傷つけているというか、そこを理解しないままでの保護者対応はやはり難しいと思う場面もある。先日、アーチルが来所した際に、お母さんが、育ちの中ですごく傷ついてきた場面もあったということをと聞いて、もちろん保育所としても、そういうことはあるだろうなと思っていても、知らないままに保護者対応、それを含めたこどもの支援を考えるというのは難しいと思った場面があった。そういう意味で、家族の支援の在り方は常に悩むところである。</p>
野口会長	<p>それでは、渡部委員お願いします。</p>
渡部委員	<p>私は、元々教員で、学校現場から行政を 4 往復して、今学校現場に戻ってきたところである。連携という切り口でいうと、戻ってくるたびに、連携の経験値があがっているな、と素直に感じている。校長や教頭で戻るなど、色々繰り返しているが、その都度、私が「このケースだとアーチルに相談だよ」「このケースだと教育委員会だよ」「区役所だよ」ということを言ってきたのだが、だんだん私がそういうことを言わなくとも、</p>

	<p>教頭先生や生徒指導主事、あるいはコーディネーターができるようになっていなど、何年かぶりに戻ると、全体のレベルアップができているのだと思う。それは、特定の学校だけではなく、全体の底上げが図られていると私は感じている。なぜかという、まさに経験値である。野口先生のように大学の先生が巡回に来たり、あるいは専門家チームで専門の方がきたり、あるいはアーチルがアウトリーチ支援で来たり、各種福祉事業所が学校に入り込んでくれたりということの、積み重ねなのだろうという気がしており、大変ありがたいと思っている。確実につながりやすくなっているという風に感じている。ただ、本当に連携が上手になったかという、そこはまた色々あり、例えば支援者会議の時に、学校から行く職員がなんのために行くのかということが分かっていないまま出席していたような事は確かにあった。そういうところを、特別支援教育課に入ってもらい、目標はこうだよという風に整理してもらいなど、そういうところが経験値として今積み重ねができているというところで、皆さんに助けていただきながら、学校のスキルは少しずつだが、上がっているのかなと思っております、感謝である。</p>
野口会長	<p>それでは、谷津委員お願いします。</p>
谷津委員	<p>当法人では、放課後等デイサービス3か所と、相談支援事業所1か所を運営している。連携というところでは、利用しているお子さん、利用者さん、一人一人が関わっている皆さんと一緒に共有しながら支援をさせていただいているということを日々感じている。連携の大切さを感じるとともに、その連携の難しさも同じように感じている。なぜ難しいかという「何のために連携をするのか」がお互いに共有されていないと、なかなか難しいという感じがしている。一つの放課後等デイサービス事業所、一つの相談支援事業所、福祉サービスができることは、限りがあるため、その障害のあるお子さんやその家族が、地域で安心して過ごせるためには、やはり地域の方たちとどのようにつながっていくか、よき理解者をどう増やしていくかということが、震災後強く感じたところだった。それも含め、アフタースクールばるけで力を入れているところとして、地域とのつながりを作っていく一つの手段として、昨年からは始めた「こども食堂」を一つのツールとして、地域の保護司や民生委員、町内会の方を含め、地域の方にボランティアに入ってもらいながら、障害のあるお子さんとその家族、また地域の方々が集まる場所という居場所作りを今始めているところである。私自身は、高校のスクールソーシャルワーカーや保護司もさせていただいているので、その視点から日ごろ感じていることとしては、スライド32の、仙台市における高等学校での発達障害児者支援に関する取り組みという部分で、普通高校において支援が必要な方が増えていると、相談の中から感じている。別紙で渡された資料2-1の現状と課題の中の、成人期の部分に「支援につながらずに大きくなった方へのアプローチ」が書いてあると思うが、どこにも支援につながらずに高校に入学し、すでにすぐこじれていて、学校に来られなくなり、学校に来られなくなると、高校では出席日数が足りなくて、辞めるかどうかという選択肢に迫られて・・・という相談が増えている。そういう方に出会うたびに無力さを感じる。「この方をどこにつなげばいいのだろう」「なぜここまで繋がってなかったのだろう」ということを感じる。最後でよいので、支援に繋がらずに成人期まで来た方たちというのは、それまでアーチルにつながらずに本当の新規で来ているのか、それともすでにつながっており、（相談をする）ターニングポイントは、たくさんあったが、保護者や本人が拒否をしたのか。それまで地域の中で困り感なく、生活ができていたのだとしたらそれはよいのだが、なぜここまで繋がらなかったのかというのは、アー</p>

	チルとしてどのように考えているのか、教えてほしい。以上です。
野口会長	それでは、米倉委員お願いします。
米倉委員	<p>当法人は、重度知的障害の方、そして自閉症も合併している非常に重い人達を対象としている事業所である。入所施設と生活介護を中心にやってきた。今年、作業部会に入って思ったことなのだが、重い障害の方はマイノリティなのだな、と思った。今日のお話の中でも、学齢児支援係は、新規相談が多く、知的に重い方達との接点がなくなっているという話も伺い、重い障害の人たちの支援者はどこにいつてしまったんだろう？と感じながら、話を聞いていた。連携でいうと、今年みずきの郷で相談支援事業所を立ち上げた。当法人の事業を利用している方の多くがセルフプランで、障害の重い人もセルフプランでの利用が主だった。さすがに相談支援事業所を立ち上げないと、これから先を考えるとセルフプランではむずかしいと思った。また、学齢期から放課後等デイサービスを利用してきた方は、当然のように相談支援が入っており、支援チームがついている様子を見て、こういう広がりやはり大事だなと改めて思い、思い切って立ち上げた。法人の中に拠点を持っており、生活介護事業所の中で一人事業で始まった。セルフプランでこれまでギリギリでやってきた親御さんというのは、本当に閉じている。先ほど、支援に繋がらないできた成人の方のお話があったが、それと紙一重である。当法人を利用している家族は、当法人の事業所しか使ったことがない方も非常に多く、閉じている状態でずっと暮らしてきた方たち。そういったご家族に「相談が入ります」と伝えても、「何それ？」という状態だったが、相談員に話を聞いてもらい、プランが出てきて「こんなことまでしてくれるんだ」と話したり、改めて我が子のお話を聞いてもらってということになったときに、「これからご本人のことを事業所の職員だけではなくて、一緒に考えてくれる人が増えるということなんですよ」という話をすると、「それはありがたい」とようやく言うてくれた。こういうことが大事だと思った。親御さんたちにとっては、世界が少しだけ広がったということになったと思うし、生活介護事業所の職員も、相談支援の職員と話をすることが増えた。また、生活介護の職員が20年通っていて聞き出せなかった情報を、相談支援専門員が当たり前のようにたくさん情報をくれ、そこでまたご本人への理解が深まっていく。このように、相談支援専門員の視点ももらいながら、一緒に情報を共有していけるというふうになる、これが今とても良いなと思っている。職員の視点の広がりもですし、ご家族が「信頼してもいいかな」と思えて、「相談してもいいですか」と言えることが増えている。ご本人やご家族の世界を広げるために、やはり連携があるのだなと、今実感をしているところである。以上です。</p>
野口会長	それでは、佐藤智美委員お願いします。
佐藤智美委員	<p>児童発達支援センターで園長をしている。児童発達支援センターが一番アーチルと密に連携をしていると思っている。やはり、子育ての入り口として、まずアーチルで初期相談と初期療育グループ、そこでお子さんの様子や保護者の様子というところを見ていただき、次に児童発達支援センターに来るというお子さんが多い。お母さんたちは「障害があるかないか」という、まだまだ不安な中で児童発達支援センターに来るので、やはり私たちの役割としては、お子さんの発達を通して、お子さんの姿を保護者に理解をしてもらう、というところを行っている。その時に、アーチルの情報やこちらで分かった情報をアーチルに伝えるなど、どちらかではなくて両方での保護者支援が必要と私は思う。児童発達支援センターで療育を行い、ある程度の節目でまたアーチルに相談というところで、密に連携をとっている。地域相談員が配置されており、今施設だけではなく、外に出て</p>

	<p>いく職員が1名配置されているが、その1名では足りないもので、現場にいる職員も含めて、地域の保育所・幼稚園・こども園に行きながら、こどもの様子を見て、一緒にどう保育ができるのか等を考えさせてもらっている。保育所・幼稚園・こども園で困っていることは、お子さんが困っているのか、先生が困っているのかをまず整理しながら、お子さんの背景やご家族の背景というところも一緒に考え、アウトリーチを行っている。まだまだ学ぶことも多いので、地域の皆さんに力を借りながら、地域相談員も成長していけたらいいなと思っている。また、家族の背景も様々で、ご両親が何か問題を抱えているご家庭もあるし、区役所や児童相談所との連携も多くなってきている。どこかだけで抱えられる問題ではないので、皆さんの力を借りながら今進めている。今後も地域に出ていくと思うが、学びをさせていただけたらと思いますので、どうぞよろしくお願いします。</p>
野口会長	<p>それでは、齋藤友美枝委員お願いします。</p>
齋藤友美枝委員	<p>障害者職業センターは、就職を希望する本人への支援、雇用する会社、事業主への支援、福祉サービスの支援員の方々への研修などを行っているセンターである。就労支援は連携がないと成り立たないものなので、福祉サービスの方はもちろん、主治医や会社の産業医や学校の先生、特別支援の先生だけでなく、普通高校の先生や大学のキャリアの支援室の方であったり、連携先は様々である。例えば、就職した後に生活保護など経済的困難が発覚した場合、区役所等と連携をしながら支援をしている。最近多いのが、会社で雇ったが、なかなか仕事に適応できないケースである。ご本人と会社との仕事の内容や役割の共有不足から指示が伝わらなかったり、ご本人に合った職務が見いだせず、ご本人が行う仕事が少なくなって課題が生じていることがある。そういったところを、カウンセラーが、会社に出向いて聞きながら、ジョブコーチと共に紐解きつつ、仕事の中身の調整や労働条件の調整であるとかを行っている。本人と話し合いながら、誤解されている特性についても、どのように会社にわかってもらうのかというところを伝え、どのように伝えるのかというところを相談させていただいている。簡単ではないが、様々な方々と情報交換しながら進めているところである。</p>
野口会長	<p>それでは、齋藤純子委員お願いします。</p>
齋藤純子委員	<p>佐々木副会長がおっしゃっていた、生涯学習についてだが、仙台市の生涯学習支援センターの方でそういうプログラムを今やっている。インクルーシブな親子の集いといった広場を行っており、アートや色々なものをワークショップで作ったりしながら、年に何度か行っており、非常に嬉しいと思います。一緒に連携をしたいと思っているが、榴岡地域の中にあるセンターなので、非常に頑張っていると思う。連携のところでは、発達障害だけでなく土台のところである。まずは、小学校長、PTA 本部会長、学校地域支援本部長、そして私（児童館館長）は月に1回必ず定例会議「つつじがおかほっとぼっと倶楽部」（名称）で、情報交換会を行っている。そこでは、会長だけでなく、本部等の役員も入っている。そこでは、活動や状況について、一度に今何がどのように動いているかを共有できる土台ができています。次に「縁が輪ねっと」というネットワークを作っている。榴岡とその周辺にある幼・保育園、放課後等デイサービス、地区担当保健師、民児協などが榴岡児童館に集まり、情報共有を年に2～3回開催している。このような土台がある中で、榴岡児童館がチャレンジしていることとしては、ここ2～3年、8回シリーズの自分と向き合うワークショップの講座を開いている。また、今年からアフタヌーンカフェという場をつくり、第一段階ではあるが、そこはインクルーシブに皆さんが集まってくる広場にしたいと考えて行っている。次に何を目標しているかというところ、地域</p>

	<p>の中では、当事者支援だけでなく、家族支援が必要であると思っている。地域で生活していくわけなので、学校だけでなく、町内会、民児協、地区担当保健師など、ケースによってはシェアしながら支援をしていくというところに、今第2段階目に行っているかな、というところである。もう一つ、成人期についてだが、児童館は、やはり楽しいことが沢山あるところ。先日も、児童館祭りを行ったら、雨にも関わらず500名来た。内訳は、こどもだけではなく、家族でくる傾向があった。こども達のお母さん達お父さん達があり、児童館の強味としては、楽しいことがあり、そこに集えろとっかかりになるところである。コロナ禍で少し途絶えてしまったが、今また復活しているので、先ほどの取り組みと、「楽しい」というところの組み合わせがもっとできたら、居場所や立ち寄る場として、門が開きやすいのではないかと考えている。成人になっても、作業所から帰ってきて「ただいま」と毎日帰ってくる成人がいる。小さい頃から「6時になったら帰る」ということがあるため、やはり地域が、その方だけではなく、家族を知っていくといった部分もある。作業所から帰ってきた成人が児童館に夕方までいると、こどもだけでなく、迎えに来た保護者も普通に受け止められている。そのような環境づくりもプラスになっている。次の段階として、学校とのこども理解と保護者支援というところでは、学年ごとの先生と児童館側との情報交換会も定時に行っている。連携というよりも、もう少しその先のところに入れたかなと思っている。</p>
野口会長	<p>それでは、齋藤淳子委員お願いする。</p>
齋藤淳子委員	<p>就職と、就職後の支援のところ、取り組みの説明をしたい。先ほど、連携の部分と家族支援の話があり、日ごろ、情報の共有の中身がどのようなことについて、やり取りをしているかが大事と思っている。何か問題が起きたときに、目に見える問題や、目に見える行動だけをやり取りしても、あまりよい情報の共有にならなかったりする。一方で、毎日通っていただいております、本人をたくさん見ている中で、なんでもアーチルに相談できるかというところには正直に言うと、自分たちも日中関わっている立場としては遠慮やためらいがある。私たちも日ごろうまくできているわけではないのだが、本人のための情報共有のあり方というのは、それが「何の目的で」「そのゴールに何があるのか」というところは意識して、そのご家族とも話し合い、連携先とも話し合っていく必要があるかなと思っている。先ほど、田中委員の話にもあったように、セルフプランで利用されている方が6割くらいいる。ただ、一方で、すべて計画相談をお願いできるかというところ、そういう状況にもないかなと思っている。そういう時に、事業所とご本人・ご家族だけ、という風になると、電話をかけると、中には「今日は何を問題起こしましたか?」と電話に出るお母さんがいたり、こちらから電話をすると、翌日お子さんが菓子折りを持ってきたりするようなことがある。セルフプランの場合は、なるべく2者だけにしないように、医師などに入ってもらっている。また、難しいと思う方については、2者だけにしないように、アーチルや職業センターなどにも入ってもらっている。通っている施設だからこそ、施設に対しては言いにくいことが本人や家族にはあると私は感じているので、計画相談が難しければ、そういった誰かが、施設には言えないようなことを言える場所があったほうが良いと常日頃思っている。そういう意味で、専門機関に助けていただいていることも日ごろある。やはり、背景の理解までに時間がかかってしまうため、大変なところはあるが、そのやり取りを丁寧にやる必要があると考えている。「好きなこと」の話では、仕事をやめる人も中にはおり、生活の枠組みが、土日も就労移行支援事業所に通いながら、エージェントの就職活動を2日間行っている人もいたり、就職</p>

	<p>して他の人と比べてできないため、併せてパソコンスクールに通ったりする人もいらっしゃる。また、ゲームセンターで多大な借金を抱えてしまい、不安だと思ったら、やはりそっち（借金）の方が不安であるなど、背景にたどり着くまでに様々なことがある。色々な機関が関わると、断片的には情報があつたとしても、生活の全体、その人が一日どのように過ごしているか、どういう人なのかというところが分かりにくくなる部分もあるかと思うため、本人のためにどのように情報共有したらよいのかは、考えながら取り組んでいるところである。家族のサポートがあまりうまくできていないところもあり、2か月に1回、今通っているお母さんと、卒業生のお母さんのおしゃべり会を始めた。最初は、私も行って、何か情報提供をしたり、助言したりした方がよいかと思っていたが、あまり盛り上がらないため、こちらが引っこむと、お母さん同士でよく話していたため、今は自分が出すぎないようにしている。来月で3回目で、そのような取り組みを始めている。以上です。</p>
野口会長	<p>それでは、今委員お願いします。</p>
今委員	<p>アーチルを立ち上げる時から関係していたこともあり、何か困ったことがあると「アーチルに相談にいったらどうですか」と話している。ほとんど診察室にこもりきりなので、あまり外とつながることはないのが実情だが、児童発達支援センターの嘱託医であるとか、そういうところで相談をうけるときに、診察室だけで解決できることはほとんどないと話している。「お薬を出してほしい」と言われて、出すこともあるが、うまく環境調整をしてもらった方が、落ち着くことが多い。とは言っても、なかなかうまくいかない「治療したらどうか」という話を受けて紹介されることも少なくない。こどもやご家族がうまくいくために、少しでも役に立てばと思って処方してはいるのだが、実際はその環境をいかに調節していくかを考えていくことが重要である。今、事業所を使っていない親御さんも多いという風に伺ったが、実際診察室で困っている方は、そういうところをなかなか使えない方が多いということが現実である。また、野口会長もおっしゃっていたが、同じことを説明しても、この方はこう理解する、この方はまったく別の受け取り方をするという場合があるため、相手に応じて考えながら説明しないと、「正しいことを言ったからよい」では済まされないことが多い。そのあたりを、アーチル職員だけでなく、様々な立場の方々も苦勞していると思うが、やはり相手の理解の仕方についての説明や、説明の仕方を変える力を付けていかなくてはいけないと思う。田中委員もおっしゃっていたが、親御さんが親身になって相談できる方がいると、結果的に落ち着いて生活していることが多く、医者がどうだとかよりも、育てた経験を持つ方が「こういうことをしたらいいよ」という、その一言で今まで苦しんでいたのが、少し楽になったというような親御さんも決して珍しくない。そういった繋がりがなかなか今できなくなっているっていうことを考えると、その繋がりを育てていくという観点も必要だと思う。あまり、連携という点では、お話できることはないが、アーチル立ち上げの時は、アーチルに相談をしたら、アーチルが直接支援を行うというよりは、その支援の先につなげてくれるようなイメージを持っていた。どうしても直接支援を求める方が多いとは思いますが、そのあたりをもう一度明確にして、アーチルに相談をしたら、必ずどこかにつなげられるとか、そこがはっきりするともう少しいいのかと思う。以上です。</p>
野口会長	<p>それでは、黒澤委員お願いします。</p>
黒澤委員	<p>当法人では、アーチルから仙台市自閉症児者相談センターの受託で、主に知的遅れのない発達障害の方々を支援している。まず、全体を通してだが、現状と課題ということでもまとめられていると思う。課題については、</p>

	<p>課題解決への取り組みが基本的にセットになってくるため、取り組みの中身を具体化していくことが重要と思う。つまり、連携強化の先に、どのようなことがあるのかという視点かと思う。現状と課題があるということは、目指すべき目標があると思うので、そうなる（解決への取り組みが）おのずと見えてくると思う。当方の取り組みから、この取り組みをどうしていったらよいかという切り口として挙げさせていただくと、一つは支援の必要性の高い方々に対する支援を切り口にしていくということがある。具体的には、知的に遅れのない方や境界域の方など社会資源に繋がりにくいようなケースの方。もしくは、精神疾患など、その他行動面の問題など二次的な問題があつて、支援機関が対応に苦慮しているような、そういった方々については、やはり仙台市全体でも、重点的に関わる対象者ということで、優先度を上げて対応すべきという風にしておりますので、先ほど佐保委員もおっしゃった、少年事件に関与するような方々も含まれると思われる。そういったことを切り口としていくのが一つと思う。もう1点は、地域でのコーディネート機能の強化ということがあるかと思う。福祉サービスの利用に至らない方、もしくはサービスは使っているが、それ以上に生活全般の課題があり、支援の必要性が高い方、これらのケースについては、おのずと支援全体の調整が必要になってくると思う。これはアーチルやここねっとがやる場合があるが、本来的には地域の相談機関がこういった機能を重点的に担っていく必要があるということであるため、こういった相談支援機能の強化について、相談支援機関をバックアップするという観点で、ここを強化していかないと全体がうまく回っていかないというふうに感じている。以上です。</p>
野口会長	<p>それでは、上西委員お願いします。</p>
上西委員	<p>東北工業大学の学生相談室で専任のスクールカウンセラーをしており、去年までは系列の仙台城南高校で同じく専任のスクールカウンセラーをしていた。高校と大学での実践というところでお話をさせていただきたい。自身は臨床家なので組織として何か他の機関と大きく連携をしているということはありません。個人の中で取り組んでいることを、この場で共有したい。うちの高校のオリジナルの「学習支援センター」という、障害のある学生生徒達が相談したり、不登校になっている子たちが来て、何とか高校卒業できるようにサポートしたりしていく、というような部屋がある。そこに専任のスタッフがいるので、そこでの連携を強化しながら、なるべく学校内でうまくいくようなサポートを取り組んできた。その中で「保護者のお茶っ会」という形で、発達障害やコミュニケーションの苦手なお子さんのいるお母さんたちの保護者会というのを、2ヶ月に1回ぐらいのペースで6～7年ぐらい続けていた。私は異動したが、後任のカウンセラーも引き継いで行っている。そこには1人の回もあるが、多い回だと5人ぐらいの保護者の方がいらっしゃり、先輩の3年生のお母さんが、「そんなこともあるよね」というのを言っていたくっというの、1年生の親御さんにとってはすごく安心に繋がることもある。卒業したこどものお母さんからも、お話を聞く機会を作るなど、保護者の連携というのが大事だというふうに感じている。私自身が、面接の中で気をつけていることは、何故今まで、相談に繋がらなかったのだろうという方が、次のステージでいろいろ苦労するという場面を高校でも見ている。「なぜ中学校のときに何の支援も受けてないんだろう」ということを感じる時があったので、自分のところで気づいた生徒さんは先送りしないように、というのはかなり意識している。私は、学校生活の中で気になった方に関しては、本人にも親御さんにも、ためらわずに「何かちょっと困っていますよね」ということと、「支援を受けた方がこういうメリットがありますよ」ということ</p>

	<p>は、先送りせずに言うようにはしている。今の大学でも「就職して、失敗してごらん」というのではなく、まずは「ちょっと今気になるよね」ということを、保護者あるいは本人に、工夫をしながら伝えるようにしている。大学の中では、今就労に関して課題になっており、3年生や4年生のギリギリになってから、何も就職活動をしてない、みたいなことで、その先が難しくなり、大学としても4年生の11月に言われても（困る）というようなことがあるので、もう少し早めから、大学も気が付けるようにする必要はある。また、本人にも気づいてもらう必要があるということで、今年から就労移行支援事業所に協力していただき、定期的なセミナーの開催を、今準備をしている。1～2年生を対象としており、入口としてはコミュニケーションスキルなど「学校の中でうまくいくために」という流れで、障害や就労ということを中心にせずに行い、後半では、就労移行支援事業所の紹介をしてもらうなど、「こんなに色々な頼れるところがあるよ」ということを伝えている。大学側としても気づいてくことと、コミュニケーションが元々苦手な学生には、4年生になるまでに、自分のことに気づいてもらうということをやれたらいいなと思っている。年に4回ぐらいは継続的にやっていきたいと、準備を進めており、今年度はまず試しに1回やろうということで、12月に1回目を開催する予定になっている。なるべく先送りしないようなところを、臨床家のところで何かできればなと思っている。また、宮城県の公認心理師、臨床心理士協会の方でも副会長をやらせていただいているが、そちらの方でも、心理士から「アーチルって何できるの？」と言われる状況はあまりよくないなと思っているので、心理士こそがハブになり、色々なところに繋げていける人材が増えていく必要があると思うので、その仲間との協働など、新しく心理士になった方の教育を、自分たち世代も意識してやっていかないといけないのかなと、今感じているところである。以上です。</p>
野口会長	<p>それでは、小野寺委員お願いする。</p>
小野寺委員	<p>私のクリニックでは、幼児から初診が中学校3年生以下までということで、大体高校生の間に必要な人は大人のところに紹介している。幼稚園とか保育園の先生や学校の先生方からの紹介や、地域の保健師からの紹介で診断をつけてほしいとか、あとは何らか治療が必要で薬物療法であるとか、環境調整など、発達障害の方・そうでない方も含めて医療の提供をしている。同じ建物の中に、宮城県中央児童相談所や宮城県総合教育センターがあるが、そことも連携し、児童相談所で対応に困ったケースなどの相談を受けている。宮城県総合教育センターでは、教員と本人・保護者が相談に来るという、教育相談があるが、そのコンサルテーションの依頼があり、医療的な面でのサジェスションなどの仕事もしている。課題としては、高校生くらいになると、それ以降の成人以降の医療を担うわけにいかないので、どちらかに紹介しなくてはならないが、どこに紹介したらいいかという、成人のクリニックにどう繋ぐかということが課題になっている。以上です。</p>

(2) 仙台市発達障害者支援地域協議会作業部会の中間報告

野口会長	<p>次に、議事(2)の「作業部会の中間報告」に進む。作業部会長である佐々木副会長から、部会での意見交換の様子や今後の方向性などについて、概要を報告し、その後、作業部会にご参加の委員からもご意見・お話をいただきたい。</p>
佐々木副会長	<p>「地域と共に進める発達支援」の追加資料に基づいて説明する。作業部会の構成員が、ライフステージも対象にしている方も非常に幅広く、多様なメンバーで進めているところである。ここまで2回の作業部会を実施</p>

し、特に2回目では、グループワークを行った。内容は、社会的な状況も変わってきており、お子さんやご家族を取り巻く状況というのも変わってきたというところで、「これからも変えずに大切にしていきたいこと」と「今の時代に合わせて変えていかなくてはいけないこと」この視点で行いました。そして本人への支援と、この会でもかなり話題になったが、保護者、ご家族の支援というこの軸で意見交換を行った。話題として大きかったのは、保護者支援の方だというふうに個人的には感じた。スライド4について、本人支援について、私自身前クールの作業部会から参加しており、前回のテーマが青年期から成人期への移行、特に知的に遅れのない発達障害の方において大事なことがテーマになっていたが、今回の作業部会でも発達早期の段階から大事であるということを私自身確認させていただいた。スライド4の図は、前クールのまとめの一つとしてあげた資料だが、やはり「楽しむ」や「好きなことを見つける」など、やはりキーワードとして今回の部会でも出てきた。特に、支援が行き届かない方たちというのも、こうした「楽しむ」ということを入口に、支援に繋がっていけるのではないかなというように、前回のワーキングでも提案されたが、やっぱりこうしたことが、支援の入口や居場所作りや、仲間関係、成長に繋がる実体験、こうしたものに繋がっていくのではないかなというように話題が出た。こちら本会でご意見いただいたが、やはり「楽しむ」ということが、どのライフステージにもわたって、大事になる軸になるのだということが、改めて確認できたと感じている。次にスライド5について、これから求められる支援について、上の2点は、これまでも出てきたが、メディアとの付き合い方は、色々な立場の方が話していた。これをどう身に付けていかなければならないかを考えていく必要があるということ。福祉サービスが充実する一方で、地域との繋がりが希薄になっている部分があるのではないかな。既に取り組みを展開されているお話もあったが、ここはやはり課題なのではないかなという意見。それから、相談支援に関わるころでは、成人期以降にでも、計画相談支援を利用していない方もいるという話だったが、やはり学齢期から、色々な支援や情報を交通整理してくれるようなサポートがやはり必要であるということが確認された。スライド6からが、保護者支援についてである。「これからも大切にしていきたいこと」で、特にこの2点目と3点目についてお話する。2点目のところに関しては、田中委員をはじめ、様々な委員からご意見をいただいたが、やはり保護者が悩みや葛藤などを打ち明けられるような関係、場、具体的に言うとなピア、同じ立場の保護者と出会うなどが、変わらず必要ということが確認できた。こどもと保護者の関わり方も、時代とともに変わってきてはいるが、やはりこどもの「好き」を、保護者も一緒になり楽しむことや、保護者が一緒にやってみて興味を持つということの大切を、これからも大事にしていきたいということを確認した。スライド7だが、社会の状況がずいぶん変わってきており、例えば共働きが一般化してきたために、こどもと関わる時間がそもそも減ってきていることや、親同士が繋がる機会がかなり少なくなっているなどがある。こういったことに伴っているのかもしれないが、保護者自身が、堅苦しいコミュニティというよりは、もう少しライトな繋がりを求めている、というような意見がでていた。そして、情報は簡単にたくさん共有されるようになったが、その分、取捨選択が難しくなったり、逆に必要な情報が届いていなかったりというような意見も出ていた。こうした中、保護者の考え方も変化してきており「子育てに失敗したくない」という風に感じている保護者も増えてきているという意見も出た。こうしたことで、ここには書いていないが、先回りをしてしまい、こども自身が経験する機会、ある種失敗するような経験を逆に失わせてしまい、成長するきっかけがなくなってしまうのではないかな

	<p>というような意見もあった。それから、福祉サービスが拡充されてきた中、こどもと向き合う時間が少なくなっているということや、支援はたくさんあるが、本当に本人にとって、将来を見据えたときに何が大事なのかということを見極めるのがなかなか難しくなっているのではないかとというようなことが意見として出た。関わりを通じて子供の成長を保護者が実感し、親自身も成長する機会というのが、なかなか得られないのではないかと考えた。それは、ひいてはこども本人が成長する機会も失われてしまうのではないかと考えた。課題として考えられた。こうした、学齢期の親子の関わりが、成人期への移行にも実は影響を与えているのではないかと考えた。意見としていただいたところである。こうしたことを踏まえ、これから求められる支援ということで、スライド8、子育てそのものを支援するような取り組み、それから情報だけではなく、本人の立場で将来を見据えて必要なことを保護者と一緒に考えていけるような支援、それから ICT との付き合い方も含めたこどもの好きなこと、それに保護者が寄り添えるような支援。そして四つ目として、保護者同士が繋がる機会。従来とは、もしかすると違った、柔軟なコミュニティというものも、必要になってくるのではないかと考えた。最後のスライドでは、私自身の解釈と、事前の野口会長からのご助言もあつての部分なので、この後、作業部会委員には補足してもらえればと思う。情報やサービスが増えていく中、本人・保護者が将来を見据えて最適な選択をできるようにするための支援のあり方っていうものを改めて考えていく必要があるということ。そうしたときに、共働きが増える中、親子の時間はどうしても昔に比べれば少なくなっていると思われるが、その中で、保護者自身が親として成長するための支援というものがどうあるべきなのかということを考えていけるといいのではないかと思った。こうした支援を実現する上で、先ほどの連携というところになってくるが、今、本当に多様な価値観に基づく支援者がいる状況である。これは民間、公的なものを含め、こうした人たちが混在する中で支援者がどういったことを共有していけばいいのか、その視点を検討していく必要がある。そして、その視点に基づいてそれぞれの立場、強みを生かし、補い合いながら、本人・保護者を支援していくための連携のあり方を、今一度問い直すということ行っていけるとよいのではないかと考えている。なかなかまとまらなかったかもしれないが、今後の方向性を定める上でも、作業部会委員にご意見いただければと思う。</p>
野口会長	<p>それでは、作業部会に参加されている委員の皆様からご意見等いただければと思う。佐藤友美委員からお願いします。</p>
佐藤智美委員	<p>作業部会に参加し、幼児期にどのようなことが必要かということ、私も再度考えさせられた。親が本当の親になっていくという力をつける時に、土台になる幼児期が、一番大事だと感じた。福祉サービスが増えている中、親と子が離れたいからサービスを使うのではなく、「何のために必要か」をしっかりと考えられる保護者になっていただきたいし、こどもの姿から何が必要かところを、わかる保護者になってもらうために、私達は何を親に伝えていかななくてはならないかを、もっと考えていきと思う。親力が弱くなっていると聞くが、時代と共に、問題を抱えている保護者、家族関係がとて多くなっている中、はっきり伝えて納得する保護者と、噛み砕いて伝えていく必要のある親が、両方いる。私達も伝え方が難しいため、アーチルや他の機関の協力ももらい、この保護者にはこう伝えるといいね、というところを色々な機関と連携しながら伝えていき、1人のお子さんを中心に、地域で支えられるような仕組み作りがこれからできたらいいなと感じました。</p>

野口会長	それでは、佐藤陽子委員お願いします。
佐藤陽子委員	<p>多様な価値観のご家庭、そして多様なこどもたちについて、共通理解するところに、ものすごくエネルギーを使うと思う。共通理解をするまでのプロセスを大事にしていくというところで、こどもたちが本当にどうしたいのか・どうなりたいと思っているのかということ、一番身近にいる保護者がわかってほしいなと思う。日中活動の場の支援者である私達の場合には、教職員が理解するというのを大事にしておき、対話を通じながら共に見つけていき、そしてこどもの「こうなりたい」を支えられる、そういったチームになっていくという部分の共通理解である。その部分にかなりの時間と、エネルギーを使っているというのが現状だと思うが、そこを丁寧にすることが、こどもの幸せや、その子なりの歩みというものを、その子が自分自身で作り上げていくというところに繋がるのだと思う。本人を育てるところでは、「自分はこうしたい」「自分はこうなりたい」ということを、周りに伝えていけるようなこども、それがアドボカシーという言葉でも表されると思うが、自分の意思を表明する力、そしてそれを受け取ってくれる人がいるという場所を居場所として、前に進もうとできるような、そういう環境作りを、地域とともにやっていくということが大事であると今回感じた。以上です。</p>
野口会長	次に、田中委員お願いします。
田中委員	<p>子育てをしていく中で、親御さんはもう少し、試したり、迷ったり、失敗したり、チャレンジしてもよいのでは？と思ったとしても、親御さんが「ルートに乗せたい」というような、自閉症だとわかったら「児童発達支援事業所を使わせるべき」というような、そういうスタイルに、今なってしまうているのだなと感じる。お母さんに対して、「あなたの子育てだよ。この子の願いは何？」と聞いても、もはや、その「願いつて何ですか？」という顔をするお母さんがいるというのが、もうびっくりするような状態である。この作業部会と離れる話題で申し訳ないが、なぜ支援を受けなかったのだろうという、お子さんに悩んでいる事業者が多いと思うが、昔の「まろん」はアーチルの相談に繋がっていないお母さんも自由に来ていいですよ、という場所だった。そこで出会ったお母さんは、支援を受けたくないというお母さんがとても多く、その中で「お医者さんに、小学校3年生になったら治りますって言われました」と話していたが、それは伝え方の問題だったのだと思う。「落ち着くかな」とか、「環境によってはなだらかになるでしょう」と言われた事を、お母さんの中で「治るって言われたんです」「だからアーチルのケースではないんです」と言って、私達のところに『何とかして欲しい』とくる。しかし、まろんで「そうじゃないよね」という話をしても、やはり小学校3年生になったら治ったのか、もう「まろん」に来なくなってしまった。アーチルのケースにはなりたくないままに、進路が決まらないなど、そういう方々が、多分今色々なところで困っているのだと思う。その家族がどうして支援に繋がらなかったのだろうと思うと、当時のアーチルの学齢児支援係の状態を振り返っていただくと、皆さんわかると思うが、やはり、学齢児支援係が信用されていなかったと思う。そのため、学齢児支援係に電話を入れるという行動が重いつかなかったご家族が、今こどもが大人になり、各所で「どうして支援に繋がらなかったんだろう」「どうして就労移行支援事業所に来るのだろう」という方々になっていると思う。ここから多分10年ぐらいは、そういうご家族がいっぱいいると思うので、ぜひ皆さん、頑張ってください。</p>
野口会長	それでは、米倉委員お願いします。
米倉委員	この作業部会に参加し、私の中で今頭が混乱しており、本当に、なかなか

	<p>かまとまらないぐらい、色々な立場の方がいらっしゃる。しかし、社会福祉法人で出ているのが私となのはな会さんだけ、というのが、私としてはすごく新鮮だった。もう、福祉イコール社会福祉法人ではない時代なのだなと改めて思った。私は、ずっと「学校がなっていない」と言っていたが、今回、佐藤陽子委員の鶴谷小学校学校の見学もし、学校がこんなにも変わってきているだっというのも拝見させていただき、すごく今頭が耕されている。この作業部会のこのメンバーをよく集めていただいたと思うのですが、まず支援者がちゃんと時代が変わっているという実感を感じながら、保護者も翻弄されていることもわかりながら、その中で、でもやっぱりキーワードとしてはさっき佐藤陽子委員がおっしゃった、「ご本人がどうしたいか」であるし、田中委員がおっしゃった、「親はどうしたいか」というところを、しっかり考えていく必要がある。ご本人に考えていただく、親御さんに考えていただく、そのためには、支援者たちが何をすることが大事だと改めて思った。しかし、時代が変わっていく中で、今まで通りにはやれないのだなということを、実感したので、私達が大事にしてきたことを、これからの方法の中に、どう落とし込んでいくのかを、新しい人達にも、たくさん教えてもらいながら、学ばなくてはいけないと今一番思っている。以上です。</p>
野口会長	<p>ありがとうございます。今ご報告の中で、情報量が多くなり、その中で適切な情報を選択することの難しさがあるという話があった。マクロな見方をすると、ネット社会の中では、フィルターバブルや、エコーチェンバーと呼ばれる現象が起こる。それは何かというと、情報が偏ってくるということである。皆さんも経験があると思うが、自分が見たもの・それに関連するものが次々と提示されてくる。つまり、フィルターがかかってしまい、入ってくる情報が偏ってしまう。なおかつ、その偏った中で意見を交換するとか、色々なことをやっていると、「それだけが意見なのだ」と、エコーチェンバーと言うが、そこだけが膨らんでいってしまう。そういう社会の中で、私達はそういう背景があることも踏まえながら、サポートを考えていかなくてはいけない状況にあるのだということも考えておく必要があると思う。世の中には色々な制約があり、皆さんも制約の中で様々なサポートをされていると思うが、少しずつ変わっている部分もある。例えば学校も、相当制約が多い場所である。次の学習指導要領に向けて中央教育審議会が部会を設置し、骨子の議論が始まっているところである。もしかしたら、だいぶ融通がきくようになる可能性がある。授業時数の関係などで、今までは、例えば特別支援学級のこどもたちは特別な教育課程という形で、通級による指導のこどもたちも特別な教育課程という形であるが、もう少し、色々な形で融通を利かせるという方向で今考えているようだ。評価の仕方も、これから少し変わっていくというような議論がでているようだ。そこが変わってくると、例えば学校に対して「こういうことを求めていく」という、こちらが学校との何か連携をしていくときも、そういうことを踏まえて、色々なことを提案できそうかと思う。</p>
野口会長	<p>皆様から他の皆様から何かご質問やご意見等ございますでしょうか？ では、谷津委員お願いします。</p>
谷津委員	<p>(佐々木副会長の追加資料) スライド3の、作業部会の取り組みの第1回で、本人支援と保護者支援ということで、部会が進んでいると、報告を聞いて思っていたのだが、なぜ保護者だけなのかが、きょうだい支援をしている立場としては、引っかかるところがある。児童発達支援や放課後等デイサービスでは、昨年の報酬改定で家族支援加算の対象がきょうだいに對する支援を行った際にも要件として認められている。本人支援・保護者支援で進めていくにせよ、3年間かけて議論を進めるのであれば、きょう</p>

	<p>だいの視点というのは必ず入れていただきたいと思っている。今の議論を聞いていても、例えばスライド6、「保護者が葛藤や気持ちを出し合える場」「ピアな繋がり」がありますが、結局こういうところに繋がれない保護者の多くが、こういう場所があって言えばよいが、多くの保護者は、きょうだいに対してその話をし、兄弟がそれを受けとめているというケースが沢山ある。そうすると、本人がどうしたいのか、自分はこうなりたいという、こどもアドボカシーの話や、親がどうしたいのかという視点での話があったが、本人のどうしたい、親のどうしたい、そのどうしたいを支えているのが兄弟だったりするので、ぜひ兄弟がどうしたいのかを大切にしてほしい。また、こどもと向き合う時間が減少しているということは、お母さん達が帰ってきたら、ご飯の準備をするなど忙しくてという、働いているからそうなる考えると、結局、兄弟がその障害のある本人の世話をする、ヤングケアラーになるという、そういう構図もある。兄弟が幸せでないと、本人も家族も幸せではない。そして、アーチルからの話で、診断はつかないが、養育環境でという話よく聞くが、やはりその兄弟自身がその養育環境の中で非常に病んでしまったり、兄弟自身が抱えていて、不登校になったりというケースも、ままあるため、ここはセットで考えていただきたい。</p>
野口会長	<p>非常に大事なご指摘だと思う。実際、兄弟は自分が主人公になる時間・機会がなかなかないということ、親御さんから「自分の思う通りにやっていいんだよ」「生きていいんだよ」と言われても、その受け止め方がやはり少し違うというところもあるので、今ご意見をいただいたが、その辺りも含め、これからの議論を進めていければと思う。</p> <p>他にいかがでしょうか？それでは、斎藤純子委員お願いします。</p>
斎藤純子委員	<p>(佐々木副会長追加資料)スライド5の、メディアリテラシー習得のための支援というところで、資料1の乳幼児相談からも見えてきたメディアの長時間視聴など、メディアとの関係が資料の中にも、言葉として出てきている。その中で、メディアリテラシー習得という部分では、保護者や本人が今どのような状況なのかを、わかっている範囲で教えてほしい。</p>
野口会長	<p>では、佐々木副会長にお願いします。</p>
佐々木副会長	<p>作業部会の中では、良い面と難しい面の両面がでていた。良い面としては、今の世代のこどもたちは、インターネットでの繋がりに居場所などの安心感を得ているという実態も一つあるという、ポジティブな面として積極的に挙げられたところだった。一方で、依存的になったり、様々な被害に繋がったり、トラブルに巻き込まれたりするなど、リスクにも同時になり得るというところで、これをどの立場の人がどのように教えるか・一緒にサポートしていけばいいのか。学校で授業の一つとして行うが、本当にどのように付き合っていくかというところまで、なかなか支援しきれない部分があり、これについては、答えが出なかったところではある。良い面も積極的に生かしたいという話題が出たところである。</p>
斎藤純子委員	<p>資料1のスライド5にも「長時間の視聴などの養育環境の影響がある」とあり、乳幼児からずっと色々な意味でメディアとの付き合い方が継続してあり、成人期になって、リテラシーをどうしていくのかになると思うが、ようやくそういうことが言葉でも世の中に出回るようになった。そのところも、作業部会の中で、成人期にまでに到達する前の段階のところを、もう少し分析していただけるとよいと思った。</p>
佐々木副会長	<p>おっしゃる通りで、小さいお子さんが例えば食事をしている時に、今メディアを片手間に見ながら外食していたりなどが、具体的に話題として上がっていたため、低年齢のところから課題意識は全体として共有できたと思う。</p>

野口会長	ありがとうございます。他に何かありますか。 それでは、上西委員願います。
上西委員	二点ある。一点目は、今のメディアリテラシーに関して感じていることとしては、単純に視聴時間や、どういうものを摂取するかということよりも、メディアで摂取したものと実体験のリンクがどれぐらいできるかということが肝心である。単純に見る時間を短くするように言っても、今の世の中では難しいため、ネット上の繋がりができるのはとてもいいことだと僕も個人的には思っている。しかし、それが最終的に大人になったときに、社会に出ていかななくてはならないとなると、実際の対人関係のところに、どうリンクしていくかっていうところを考えていかなければならない。視聴したメディアの楽しかったものなど、例えばアンパンマンの動画見せたのであれば、体験をしにアンパンマンミュージアム行へこうとか、何か親御さんも、ただ見せるのではなくて、見せたものと、本人が実体験としてリアルでも楽しんだというところに繋がっていく取り組みが必要。それは、こども自身というよりは、やはり親御さんと支援者が、メディアと実体験をどうリンクさせるかというところを、意識していくことが、メディアリテラシーとしては大事と感じる。もう一点、細かいことだが、追加資料のスライドの9の一番上に「本人・保護者が将来を見据えて最適な選択をできるように」というところ。「最適」という部分に、自分が少し引っかかっている、あまり最適を目指さなくてもよいのではないかと考えている。失敗も含め、保護者が「失敗してごめんね」とこどもに言えることが、こどもも「失敗していいんだ」ということに、繋がっていくかなと思う。そのため「ベスト」というよりは、「やってみようよ」「ごめん、失敗しちゃった」と親が言える。それが保護者同士や支援者レベルで、「失敗するよね」ということが保証されて、親御さんが安心できると、最終的にはこどもも、失敗しても選び直せるというか、チャレンジできるという形になっていくのかなと常々思っているの、最適じゃなくてよいのではないかなということを感じた。以上です。
野口会長	ありがとうございます。メディアリテラシーに関しては、今、メタバースを使った支援が、例えば不登校や、あと自死関連などで、取り組まれている。実は文科省も強く進めており、全国の50ぐらいの自治体では、もうすでに取り組んでいる。仙台市も取り組んでいるが、そういうところをどう使っていくか。そこでの繋がりができ、またそこからどう広がっていくかというようなところも、考えていく必要があるのかもしれないと思っている。それと、「最適」の話があったが、学校でも子供たちに失敗させないようにというのが、最優先になるところがあり、失敗経験を積ませない、というのがあるが、私は、個人的には失敗はしてもいいのだと思っている。ただし、失敗を失敗で留めないというのが大事だと思っている。そのため、失敗をしたときに、きちんとそれをサポートし、またやり直せる、またトライできて、次はちゃんとできるという方向に持っていけるといような形になっているとよいと思った。実際、そういった取り組みを、学校で佐々木委員と一緒にやったこともあるが、非常によかったと思っているので、そういったことを考えていく必要があるのではないかなと思う。他にございますか。では、高橋委員願います。
高橋委員	(佐々木副会長追加資料)スライド5で、本人の支援でこれから求められる支援のところに、幼児期から「楽しむこと」「好き」を育む支援があるが、私は、宮城野区の市民センターで9月頃に、フラットシアターフェスティバルというイベントがあったが、障害のあるお子さんが参加しやすいように、いろいろと環境を整えてイベントを開いていた。例えば、聴覚過敏があり、音がしんどかったらイヤーマフを貸し出したり、ステージ発

	表があるが、刺激が多すぎて少ししんどいときには、途中で会場から出てよいというようなことが、最初からわかるようになっているなど。センサリールームという、静かな部屋で休憩できる場所があるなど、環境を整えた上でイベントが開催されており、こういう場所がもっと増えると、色々な体験をする場所や、体験する機会というのを増やしていけるのではというふうに思った。以上です。
野口会長	ありがとうございます。Jリーグでも、音のない静かな部屋で観戦できるような取り組みをしており、あるドラッグストアではクワイエットタイムという、音楽を流さない静かな時間帯を作るなどの取り組みをしているようである。他にありますか。それでは今委員お願いする。
今委員	小児科医として、メディアについては、1ヶ月健診や2ヶ月健診など、まだその障害があるかないかという話ではない時期に、親御さんにお子さんへの接し方や、メディアとの接し方を言わないと遅すぎる。メディアのメリットはあるので、使えるようになってから使えばいいのだと思うが、まだ生まれてきたばかりのお子さんは、直接、親と目と目を合わせたり、抱っこしてあげたりするなどが大事であると伝えたい。小児科医としては、今の時代は、抱っこをするのにも下手な親御さんが多いため、昔ながらの接し方を覚えてもらうことも必要であると思っている。
野口会長	私は、個人的には赤ちゃんは一日中見ていても飽きないので、ずっと見ていたいと思うが、今はやっぱり忙しいこともあるためか、メディアに任せてということが、少し多くなっているのは、確かにあると思う。

(3) その他

野口会長	議事の(3)その他について。委員や事務局から何かありますか。それでは事務局からお願いする。
事務局 (葛森所長)	参考資料1「本市の就学前療育支援体制のあり方検討」をご覧ください。8月の議会の常任委員会の中で、健康福祉局としてご説明申し上げた中身を、本協議会の委員の皆様方とも共有させていただく。仙台市の、就学前の療育支援体制のあり方について検討を行っていくというものになる。就学前療育支援体制の現状と課題について、ここには書いてないが、出生数が大幅に減少しているという現状がある。アーチルが開所した当時は、年間9,000人の出生数に対して、今は6,000人の出生数であり、生まれるこどもの数が減っている。それにも関わらず、児童発達支援事業所を利用する方は非常に増加をしているという状況がある。児童発達支援事業所を利用する場合に、アーチルで支給決定を行うため、アーチルでの相談が必要になる。そのようなこともあり、アーチルに相談歴がない方については、相談を申し込んでいただく必要があるため、「すぐに児童発達支援事業所を利用したいのに、すぐにできない、アーチルが混んでいる」という声にも繋がっている。児童発達支援を行う事業所の数も、現在仙台市で80件を超えており、急激に増加しており、利用する児も増えている。そして、保育所で重度のお子さんを受け入れるという形で、保育所の受け入れも増えてきているが、そもそも就労する世帯が増えており、低年齢から保育所に入っているこどもが非常に増えてきている。そうすると、例えば児童発達支援センターの中でも、親子通園のタイプのところが定員を埋められなくなってきている。お子さんの発達支援、保護者支援をするところ、児童発達支援センターと児童発達支援事業所、両方役割が重なっているところがある。そして(3)について、児童発達支援センターは、地域の中核的な機関として、地域支援をしっかりと行っていくよう国も求めている。このように、就学前の状況が変わってきている。平成24年の児童福祉法改正の際に、今の箇所数を検討して11ヶ所で行っていくということ

	<p>になったが、今後は、箇所数や役割など、色々なことを含め、もう今見直しをしなくてはならない過渡期にきている。そのため、しっかり本市としてあり方を検討していく必要があるということで、裏面をご覧いただきたい。令和7年度から次年度年央まで、まずはワーキングということで、児童発達支援センターの園長やアーチル、障害者支援課などが、特に児童発達支援センターのあり方を中心に検討を行っていく予定である。その検討を踏まえ、次年度の年央以降、外部有識者会議を設置して、就学前療育体制のあり方の検討を1年間行い、令和9年の年央くらいまでということで予定している。ここでの検討を踏まえ、令和10年度以降、就学前療育支援体制のあり方を見直した形で行っていくということで、現在予定している。この協議会の中での検討や、いただいているご意見と、ちょうど重なる中身であることと、これから検討が進んでいくため、この場で共有させていただいた。以上です。</p>
野口会長	<p>議事は以上となります。皆さまありがとうございました。進行を事務局にお返しする。</p>

事務局より

- ・本日の議事に関し、追加のご意見がある場合は11月4日（火）まで、事務局宛てにメール・FAX等でお知らせいただきたい。また議事要旨は事務局で案を作成の上、委員の皆様へ送付し、加除修正をいただいた後、確定する。
- ・次回の開催は令和8年8月～9月頃を予定し、改めて事務局からご連絡する。

令和8年1月17日

署名委員： 小野孝滋